
 私がなぜ現在の科目を選んだか

「小児科」

信州大学医学部小児医学教室

三代澤 幸秀

小児科を選ぶ人には2つのタイプがありそうです。ひとつは子どもが大好きな人、もうひとつはいろんな分野に取り組みたい人です。現在の私はかなりの子ども大好き人間なのですが、就職の時点では明らかに後者でした。当時は初期研修のシステムはなく、卒業後すぐに入局する形だったのですが、私は卒業時に専門分野を絞りきれなかったとも言えます。というのは、学生時代の私は模範的な学生とは言い難く、なかなか医者になっている自分をリアルに思い描くことができませんでした。そんな自分には働きながら専門を選ぶことができそうな小児科が魅力的に映ったのです。小児科になってみると最初の大学病院の研修では4か月神経班、4か月血液班、4か月代謝・内分泌班というローテートで幅広く学ぶことができました。2年目は一般小児科、3、4年目では小児循環器科という流れで

学ばせていただき、入局時の期待通り幅広い経験を積むことができました。その後は一般小児科として働いている中で、新生児医療の技術の重要性を痛感し、数年間の新生児医療の研修を行うつもりが、気づけばその道17年になってしまいました。そして長年新生児医療に従事していると、退院後のお子様の生活がとても気になるようになり、現在は在宅医療に関する研究に取り組んでいます。振り返ってみると、私の選択はまず何かしらに取り組んでみて、その中で大切に感じたことを選んでいくという形になっています。そんな私が現在縁あって大学病院で教育をしていると、しばしば若い頃の自分のような学生を見かけることがあります。そんな時は、なんとかやる気にさせてあげたいなあと自分なりに工夫しています。なかなかやりたいことが具体的に見えない医学生もいらっしゃると思いますが、大丈夫。医者になってからも意外といろんな選択肢があるので、きっといつかは自分の道が見つかりますよ。もし本当に人生に悩んだときは、かつての彷徨える医学生の一人として相談に乗りますので、ぜひ声をかけてくださいね。

(信大平12年卒)

 私がなぜ現在の科目を選んだか

「遺伝医学」

信州大学医学部附属病院
遺伝子医療研究センター

山口 智美

私は、長野県青木村出身で、富山大学大学院理工学研究科生物学専攻で植物の遺伝子の研究をし、長野県に戻って食品会社に勤めた後に、信州大学にきました。食品会社での入社時に「自分を生き物に例えて自己紹介してください」と言われ、「アリです。体は小さいですが体力には自信があります」と話したのをきっかけに、力仕事中心のトマトの品種改良をする部署に配属になりました。品種改良には長い年月がかかることを知り、また、畑での観察の重要性を実感するとともに、社長・上司が代わったタイミングで、遺伝子変異の有無で選抜することによる効率化を提案する機会を得ました。そして、担当するテーマにおいて、今年の試験栽培がうまくいけば次は契約農家での試験をお願いできるかもと考えていた入社6年目に、会社分割、部署解散、品種改良中止の発表がありました。そこで転職を決め、信州大学医学部遺伝医学教室で実験補助をする仕事に就きました。2年目の2012年に、遺伝性

疾患の原因遺伝子の解析を次世代シーケンサーという機器を用いて行うことになり、解析体制の構築に立ち上げから携わらせてもらう機会を得ました。2017年からは、検査の母体が病院（遺伝子医療研究センター）に移り、研究ではなく、健康保険を使用して受けられる検査として発展、翌年からは外部からの受託も開始されました。2020年には、日本における遺伝学的検査の普及を目指して、医学部にクリニカル・シーケンス学講座が開設され、毎週1回、講座メンバー、臨床遺伝専門医、衛生検査所、検査会社、機器メーカーとで適切な遺伝医療について話し合う機会を得ました。人に「おいしい」を届ける仕事から、より直接的な人の疾患に関わる仕事へと変わり、気付けば日本の将来を考えるような今があります。なぜこの科を選んだか？と振り返ってみれば、遺伝子に関わりたいたいという思いと、様々な分岐点で運と人の縁に恵まれたことで、今の職場、立場に導いてもらえたのだと感じています。時間をかけて丁寧に話を聞く、世代を超えた長期的なフォローをするなどの遺伝科としての特殊性（特別感）、他科との連携の重要性などを日々感じながら、適切な検査を届けることを第一に考えて日々仕事をしています。

(富山大大学院平17年卒)